心のバリアーをとりはずそう

－精神障害回復者の会主催の福祉ショップ「ふれあいショップ」の活動を通して－

菅原栄子（若柳町役場）　大場幸江（瀬峰町保健センター）　舟山みゆき（一迫町役場）

＜要旨＞

宮城県北に位置する、栗原郡には、昭和４６年から「めざめの会」という精神障害回復者の会があり、３０年経過した現在も活動を継続しています。

この会が地域に根ざした活動を通じ、お互いの親睦と理解を深めていこうという事で、平成９年「ふれあいショップ」という福祉ショップを開店しました。

障害者基本法に定義されている身体・精神・知的の三障害の中でも一番理解されにくく対策の遅れている精神障害ですが、地域の人達とふれあう福祉ショップの活動を通し、お互いの心のバリアーをとりはずす為になにが必要かを考察してみました。

＜キイワード＞

めざめの会　福祉ショップ　めだかの学校

＜はじめに＞

めざめの会は、昭和４６年保健所の精神保健相談利用者等を対象に、保健所主催で行われた社会復帰訓練事業がきっかけで発足しました。

しかし、休日の行事開催に、行政がどこまで責任をとれるのか等の問題が持ち上がり、結局行政から独立した形で、翌昭和４７年に患者会独自で活動をスタートしました。

その後、会の名前も「めざめの会」となり、年６回の行事と機関誌の発行は今も続いています。又、会は当事者をはじめ家族や保健婦そしてその子供・夫その他役場職員やボランティアの人等主旨に賛同する様々な人で構成されています。

活動を通して、みんなと会う楽しみや共に外出する楽しみが増え、頑なだった心が除々に開き始めていき、少しずつ自信を取り戻し、自分なりの暮らし方を見い出していけるようになってきました。

会の内容は、できるだけ当事者の要望・意見を取り入れ、レクリエーションだけでなく、病気とどう付き合うか、仕事や恋愛の事等、お互いに話し合ったり、他の障害を持つ人達とも交流を行ってきました。

平成４年には、会員である保健婦の脚本でメンバーをモデルに演劇「めざめものがたり」が上演されました。この物語に出てくる、誰でも気軽に立ち寄れて、自分の家で作った野菜などを持ち寄り販売もできるような、みんなの拠り所となる「めざめの家」の実現、それが今の「ふれあいショップ」です。

＜手作りとリサイクルのお店＞

―ふれあいショップの開店―

一軒の空き店舗を借り半年程の準備の後、様々な人の手助けで平成９年１月に待ちに待った「ふれあいショップ」がスタートしました。

当初週１回だった開店を、お客さんの要望から現在は週２回（毎週水・土曜日）１０時から１５時まで開いています。毎日開けたら……という声もありますが、維持費や店番をするスタッフ等の問題もあり現状のままにし、それ以外に色々なイベント等に出張販売に出かけています。

開店時間の１０時前、その日割り当てのボランティアスタッフの外、当事者が来て開店前のお掃除。お湯を沸かしてお茶の準備と大忙し、お店の外に「ふれあいショップ」ののぼり旗を立て、エプロン姿も凛々しく開店時間の１０時です。

「いらっしゃいませ。」来たお客さんへの対応も心得たものです。

「これは○○作業所で作った刺し子です。」

「こちらは、８０歳のおばあちゃんが作った巾着です。」

「リサイクルの物もございますよ。」

お客さんのほうからも「へーぇ、８０歳になっても上手につくるもんだねぇ。」

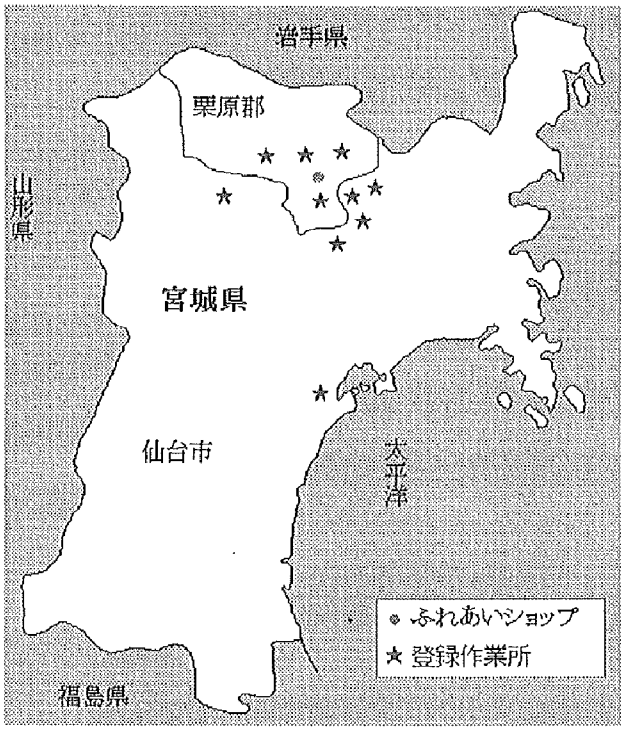
「ところで今日は、大根入っていないの？この間のとっても美味しかったよ。」等と声がかかります。

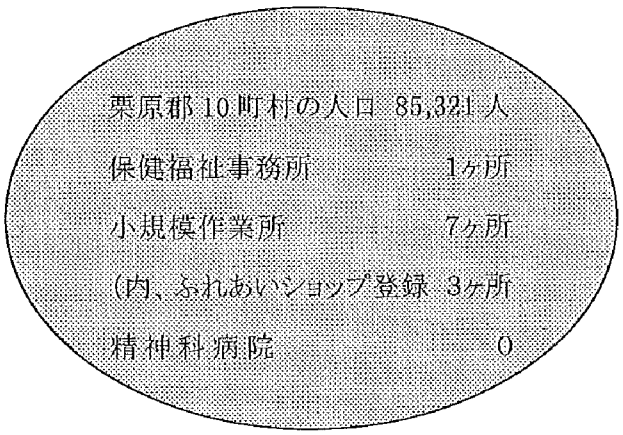
「お茶っこ飲んでいかいん。」と声をかけられたお客さんが中に上がり込んで“話し語り”をしていく事もしばしば。

雨や雪、農繁期等でお客さんの少ない時は、端切れ等を使ってショップオリジナル作品を作りながら、スタッフ同士の様々な話しで盛り上がります。

＜ショップの活動の中から＞

作品登録者の拡がり





・お店には、郡内はもとより郡外作業所からも手芸品や個人登録者の作品が所狭しと並べられており、登録者の数も年々増えてきています。

（作品登録者年次推移）

年	H9	H10	H11	H12
作業所登録数	3	6	8	8
個人登録者数	22	43	63	71

・個人登録者の多くは趣味で作っていたものが実益にもつながり、何よりお客さんの反応も良いとあって、創作意欲が高まり、生きがいづくりにもつながっています。

・又、ショップの主旨に賛同する多くの方々から家庭で眠っている日用雑貨や古着等を寄付していただき販売しています。

いこいの場としての定着

・当事者にとって、仕事や日常生活で疲れた時ここに来れば聞いてもらえる、みんなと話しているうちに少し楽になれる、という事で元気を取り戻す場として利用しています。

・逆に地域の人達、特に行き場の少ない高齢者にとっても、「ここはみんな正直な人達でホッとする」と開店を楽しみに来て話し語りをしていく常連さんもいます。

お客さんとのかかわりの中での変化

・最初はお客さんにうまく声がかけられなかった人もボランティアスタッフの声のかけ方からちょっとしたコツを学んだり、逆にお客さんの方から声をかけられ、自然に会話が拡がるようになりました。

・又、愚痴をこぼしたり何回も同じ話しをする近所のおばあさんの話しを、最初一生懸命聞いて対応しヘトヘトに疲れていましたが、徐々に適当に話を合わせたり、受け流しができるようになりました。

・様々なお客さんに出会う事は、世間には色々な考え方の人がいる事を知らされました。

☆手作りの刺し子、お友達にプレゼントしたらとても喜ばれたよ。

☆ここのお店から買ったこのバック、気に入っていつも愛用しているの。友達に誉められたからあんたもふれあいショップに行ってみたらと勧めたの。

☆夫が退院したからお見舞いをいただいた人へのお返しにここの作品を使おうかと思ってというような人もいれば、

☆「これ高いんじゃない」と何かにつけ文句をいう人

☆「もう少し値引きならない？」毎回来ては徹底して値切る人。

☆子供が母の日のプレゼントにと買って行った古着をわざわざ返しに来た母親もいました。

☆「手足に障害がないのに何で働かないの」「仕事選んでないで何でもいいから働いたらいいのに」と言われたり、「あんたはどこ町の誰の息子？」等と根堀葉堀聞かれて落ち込んだりする事もありますが、保健婦やボランティアスタッフ等と話したり、ショップで働いたりするうちに徐々に乗り越えられるようになってきました。

ボランティアスタッフとのかかわり

栗原には、メンタルヘルスボランティアの講習を受けた人達がいて、ショップの店番やリサイクル用品の提供、めざめの会の参加等の形で支援しています。

昨年は、メンタルヘルスボランティアのシンポジウムの中で当事者や保健婦が体験発表を行いました。

＜まとめ＞

精神障害者が暮らしやすい社会とは、他の障害者や高齢者にとっても暮らしやすく、つまり誰にとっても暮らしやすい社会であると思います。

手足を動かせば動くのに心が動かない為に体も動かない、又、やっと動くようになったのにそれを生かせる場がない等、様々な不自由さを味わっている精神障害者を理解していく為の近道は、頭で考える事より一緒に考え行動する事であると考えます。

ふれあいショップの活動は、精神障害者の為でもありますが近所の高齢者の為でもあり、ボランティア自身つまりショップにかかわるみんなの為のものです。

今後、ショップだけでなく日常様々なところで一緒に行動する場面が増えていく事が必要であり、障害があるのかないのか区別のつかないつまり「めだかの学校」（誰が生徒か先生か、区別がつかない）になった時、心のバリアーがなくなった時であると思います。